佐々美と佳奈多の野球戦線

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
佐々美と佳奈多の野球戦線

【Ｎコード】
Ｎ５２５８Ｐ

【作者名】
ゲキガンガー

【あらすじ】
死後の世界の野球戦線のおまけです。

１月１６日のコミトレで出すつもりなのでよろしくお願いします。

死後の世界の野球戦線番外編『佐々美と佳奈多の野球戦線』

「しまったー！忘れてたよ」
ＳＳＳの作戦司令室で、大山は突如叫ぶ。
「忘れてたって何をだ？」
そう日向は訊いた。
「佳奈多さんと、佐々美さんを出す事をだよ」
「なんだってぇ！　てーへんだー！」
なぜか、江戸っ子口調でユイは叫び。
「――って、それって誰ですか？」
と、ユイは訊いた。一同はズッコける。
「竹山君、ユイに教えてあげて」
「――ところで皆さん、僕、ことクライストはクライストから改名しようと思ってるのですが、何が良いでしょうか？」
勿論答えるものはいなかった。竹山は気を取り直して。
「佳奈多さんは、三枝葉留佳さんの双子の姉、佐々美さんは、棗鈴のライバル役として、リトルバスターズ本編では登場しますが、エクスタシーでヒロインに昇格したキャラクターです」
「ああ。あの二人ね。処女作のリトルバスターズｖｓ古河ベイカーズから、作者はあの二人に対する扱いが酷いわね」
「作者曰く『何と無く忘れる』らしいよ」
と、大山。
「……エクスタシーでしかでない沙耶でも出てきたのにな」
と、音無。
「まあ、居ても居なくても大して変わらないものね」
と、ゆり。かなりひどい発言だった。
「それを言えば、うちの戦線のメンバーは殆どいらない登場人物ば

かりじゃねーか」
と、藤巻。
「ついでに言わせて貰うと、キャラクター減らすとしたら、まず真っ先に消えるのは、藤巻君、あなたよ」
と、ゆり。
「そいつはないぜゆりっぺ。俺には噛ませ犬としての立派な役割ってもんが――」言ってて情けなくなったのか、藤巻は押し黙り、急に「いいんだ。別に俺はいいんだ。真っ先に俺が成仏したっていいんだ」と、部屋の隅でいじけはじめた。
「あさはかなり」と、椎名。
「けど、エンジェルビーツの世界観だと、登場させる事は難しいんじゃないの。その、設定的に」
と、ゆり。
「そんな事は読者の誰も気にしないよ」
と、大山。
「……うーん。まあそうね」
「――けど、どうするんだ？　いちいち本編を書き直すわけにもいかないだろう」
「そういうわけで、ここで番外編を書く事にしたんだよ」
「……まあ、猫も杓子も番外編、続編ね。けどこれ、オフセットで出す予定なんでしょ。ただでさえ本編分厚いのにさらにコストが――」
と、ゆり。
「――というわけで、死後の世界の野球戦線番外編『佳奈多と佐々美の野球戦線』スタート！　です！　にゃん☆」
強引にユイがスタートを切った。

キィン。
甲高い音と共に白球が舞った。
「ほら皆、声が出てないわよ！」

ゆりの怒鳴り声が響く。
死んだ世界戦線とリトルバスターズの試合が決まってからというもの、ゆりによる過酷な練習が繰り広げられていた。
「……もう許してくれゆりっぺ」
ファーストの藤巻が膝をついた。
「甘ったれるんじゃないわよ！　そんなんで連中に勝てると思ってんの！」
ノックをしているゆりは嬉々とした様子だった。余力がありあまっている様子だった。対する他のメンバーは、
「……先輩、あたし、もうだめです」
と、ユイ。今にも膝をついて倒れそうな程疲弊していた。
「しっかりしろ、ユイ。……ゆりっぺはああなったら倒れても許してくれないからな。俺達はゆりっぺが練習に飽きるまで付き合うしかない」
そういっている日向も肩で息をしている。疲労がたまっているのは目に見えている。
「ふん。情けないぞ屑ども。そんな事で試合に勝てるとでも思ってるのか？」
直井は――監督という立場にあるので、ベンチで涼んでいる。その横にいる天使こと立華奏もまた、その横に座っていた。
「お前もちったぁ練習に参加しろ！　大体何でこんな奴が監督なんだよ」
たださえストレスのたまっている日向がキレた。
「ふっ。神には相応しいポジションだ」
「落ち着け、日向」
と、音無。音無はあまり疲れた様子はない。
「お前はいいよな音無！　なんかお前だけボール来ないしな！」
「だって音無君にノックすると、直井君がうるさいんだもの」
ゆりは言った。
「当然だ。音無さんに泥臭い練習など似合わない」

直井は自身満々に言った。
「あーくそ！　なんなんだよそりゃ！　なんで死後の世界に来てまで俺達はこの世の不条理に苦しまなきゃなんだよ！」
日向は叫んだ。
「四の五の言ってないで、いくわよ。セカンド！」
「くっそ！」
日向はあふれ出てくる汗を拭い、構えた。
ゆりはスイングをする。
飛んできたボールは、打ち損じたのか、なだらかなフライだった。
そのフライを日向はゆっくりと見上げ、グローブを構えた。ゆっくりとボールが落ちてくる。
「――俺、このセカンドフライを取れたら成仏するんだ」
まるで、魂の抜けた人形のように生気のない顔で、日向はグローブを掲げた。
「だめです先輩！　だめですってば」
横からユイが妨害する。
「放せ！　こんな不条理な世界だったら、成仏した方がまだマシってもんだ」
「だめです先輩！　早まらないでください！」
ガン、と、そのフライは妨害していたユイの脳天を直撃する。
「ぐぇ！」
そして、そのまま意識を失うかのように倒れる。
「しっかりしろユイ」
「先輩、ユイもうだめです」
「何言ってるんだお前」
「わかるんです。あたし、もう長くないって」
今にも消え入りそうな声。
ユイは日向の手に、手を重ねた。
「きいてくれますか先輩、ユイには夢があったんです」
「なんだそれは？」

「結婚、したかったんです。お嫁さんになりたかった。もし、ユイがこのまま消えるとしたら、先輩は結婚してくれますか？」
「ごめん無理だわ」
「即答！　即答ですか！　一世一代の乙女のプロポーズを即答ってどういう神経してるんですか？　そこは『俺が結婚してやんよ』っていうところでしょうが――――！」
「そんな臭いセリフ口が裂けてもいわねーから安心しろ」
「……ふん。馬鹿ばかりだ」
ハルバートを持った野田は呟く。
「ほら、野田君もサボってないでノック行くわよ」
「待っていたぞゆりっぺ。ゆりっぺからの愛の鞭なら、どれほど苛烈であろうと受け入れよう」
野田は、大きく手を広げた。全てを受け入れるかのように。グローブは持っていない、念のために言っておく。
「ぐえっ……なんか気持ち悪いからパス。次、藤巻君」
軽く嗚咽しながらゆり。
「さっきやったばっかじゃねぇかよゆりっぺ」
「こういう時はあなたの役回りって決まってるのよ」
ある意味、平和な情景だった。
「おーっほっほっほっほっほ」
その中に、突如場違いな程甲高い哄笑が響く。
目の前には、体操着を着ている女生徒が一人。どこか女王様風で、唯我独尊な感じのする女生徒だった。
「――神聖なるグラウンドを不法に占拠するとは、良い根性ですわ。天が許してもソフトボール部の四番にしてエース、この笹瀬川佐々美が許しませんわよ」
女生徒は続けた。笹瀬川佐々美というのであろう。
「なんだありゃ？」
と、藤巻。
「ＮＰＣじゃないわね。ＮＰＣがこんなことするはずがない」

と、ゆり。
「――しかし、今何て言った？　佐々――なんたら」
と、日向。
「笹・瀬・川・佐・々・美ですわ！」
声を大にして、佐々美は言う。
「それで、佐々木さん」と、ゆり。「笹・瀬・川・佐・々・美ですわ！」という、再度の佐々美の大声も全く気にしていなかった。流石はゆりだった。
「あたし達、死んだ世界戦線に一体何の用かしら？」
「……なんですのそのなんたら戦線って、何かの特撮の影響ですの？」
「こいつ、ここが死後の世界だって気づいてないのか？」
と、日向。
「なんですの、その死後の世界って、オカルトですの？　ちゃんちゃらおかしいですわ。おっほっほっほ！　もしここが死後の世界だっていうのなら証明してみて欲しいものですわ！　おっほっほっほ！」
佐々美は再度哄笑した。
「音無君と同じパターンね。まだ、この世界の事を認識できていない。奏ちゃん」
ゆりはベンチにいる奏を見た。そして、奏は頷いた。アイコンタクトは成功したようだ。奏は立ち上がり、ずんずんと歩き続ける。
「ハンドソニックバージョンワン」
突如、奏の手の甲に剣が装着された。
「――な、な、なんですの一体！」
そのまま奏は、佐々美めがけて歩き続けていく。
「ひいっ！」
思わず目を覆ってしまう佐々美。
――そして。
佐々美を通り過ぎ。藤巻の前に立った。

「ぐうはっ！」
手の甲の鋭利な刃物で突如藤巻は胸元を貫かれた。そして、口から大量の血液を吐き出す。
ゆっくりと刃物を引き抜くと、藤巻は地面に崩れ落ちる。
「ひ、人殺し」
返り血を浴びた奏を、怯えきった眼差しで佐々美は見ていた――が。
「――てめぇ何すんだ！　こら！」
藤巻は瞬く間に蘇る。
「……な？」
佐々美は目を丸くする。死んだはずの人間が生き返った。いや、確実な致命傷だった、それでも尚生きていたのだ。
「わかったでしょう。ここは死後の世界なのよ。誰も死なない。病まない。そういう世界なの」
ゆりはそう告げた。
「――そんな、ではわたくしは」
その言葉の意味を理解したのか、佐々美は愕然とした。
「そんな、わたくしはまだやり残した事がありましたのに」
佐々美は膝をつき、涙を流し始めた。
「やり残した事があるのは皆同じよ。だからここにいるの」
ゆりは冷徹に言い放つ。佐々美はただ、現世での後悔を悔いているようだった。
「……ふんっ。何だかよくわからんが、元気を出せ」
野田は言った。
「気休めなど結構ですわ――」
佐々美は涙を指で拭い、野田を見上げた。
「……なんて凛々しいお方ですの」
ドクン、と、心臓の音が聞こえてくるかのようだった。当然のように聞こえてはこないが。
『は？』
一同の声は被る。野田以外だが。

佐々美は、そんな事おかまいなしだった。火照った顔で、野田を見上げ続ける。
「――あなた様は、失礼ですが、お名前は何とおっしゃりますの？」
妙な敬語だった。
「野田だが」
「野田様」
『野田様！？』
再び一同の声は被った。野田以外。
「いったい、どうなってんだ、ありゃ？」
日向は奇怪なものを見るように言った。
「鈍いですねー、先輩。あれは恋する乙女の眼ですよー」
「はぁ？　あの野田が。何で？　ありえねぇだろ」
「趣味は人それぞれ、って事だろ」
と、音無。
一同は棒立ちしている。
「野田様、わたくしは、笹瀬川佐々美と言います」
「……そうか」
野田はハルバートを掲げ、そっぽを向く。
「なんて凛々しいお姿、素敵ですわ」
佐々美は完全にスイッチが入っているようだった。
「……まあ、とりあえず、立ち直ったようね」
と、ゆり。
「……この世界でもわたくしは、生きていく意味を見いだせましたわ」
「いや、死んでるんだが」
日向の突っ込みも、佐々美は聞く耳持たない。
「悪いが、俺にはゆりっぺがいる」
「ゆりっぺ、誰ですの、それは？」
一同の視線が、ゆりに向く。
「え？　あたし？」

お前に決まってるだろ、皆が視線で言う。
「な……あなたも、もしかして野田様のことを」
「それは死んでもないわ」
死後の世界で死んでも、というジョークでもあった。
「あなた、わたくしと勝負しなさい」
「はぁ？」
「勝った方が野田様から手を引く、という事でどうですの？」
「手を引くも何も、あたしは何でもないわよ」
「勝負は三球、あたくしの投げるボールを打てば、あなたの勝ちですわ」
聞いちゃいなかった。

「って、なんでこうなってるのよ」
ゆりはバッドをもって打席に立っていた。ヘルメットも被っている。
「おっほっほっほ。栄えあるソフトボール部の四番にしてエース、この笹瀬川佐々美のボールが打てるとでもお思いですの？　おっほっほっほ」
普通のピッチャーマウンドより前の方に、佐々美は陣取っていた。ソフトボールは若干距離が短いようだ。
キャッチャーは音無がやるようだった。本来は野田なのだが、佐々美が緊張するという理由により、音無がキャッチャーになった。
「どうでもいいけど、早く終わらせなさいよ」
ゆりはもはや投げやりだった。
「ゆりっぺ……俺の為に」
「違うわよ！」
野田の声を大声で遮る。
「では、いきますわよ」
佐々美は振りかぶった。ソフトボールの投げ方なので、下投げだ。円を描き、下からボールを投げる。
「つっ」

ゆりは舌打ちした。反応できなかったのだ。ライズボールというやつだろうか。下から浮き上がってくるようなボールだ。初見で打つのはとてもではないが、困難だろう。距離も短い事もあって、実際より球も速く見える。
実際ボールをとった音無が、その事を何より感じていた。
「おっほっほ。手も足も出ないのではなくて」
佐々美は哄笑した。そして、二球目。
ゆりはスイングをしたが空振り。とてもではないが二球では捉えられるものではなかった。
「……あなた、なかなかやるじゃない」
「当然ですわ」
「ええ。今度の闘いの戦力に欲しいくらいだわ」
ゆりは、バッドを短く持った。純粋に、この勝負に勝ちたいという気持ちになったようだ。
「……ゆりっぺ俺の為に」
「――やる気なくしたわ」
ゆりはげんなりとした顔で呟いた。
「三球目、行きますわよ」
何にせよラストボールは、佐々美は振りかぶり、そして――。
「ん？　何をやってるんだお前ら？」
「え？」
佐々美は途中で、ボールを落とした。
「み、宮沢、様」
『宮沢様？』
一同は疑問符を浮かべる。野田以外。そこには、ジャンバーを着た宮沢謙吾がいた。
「……お前は、笹瀬川じゃないか。奇遇だな、こんなところで」
どこかよそよそしく、謙吾は言った。目が泳いでいる。視線を合わせたくないかのようだ。
「まさか、この世界でまで宮沢様と出会えるなんて思ってもいませ

んでしたわ！　……これは、もしかして、運命の再会ですの？」
佐々美は、火照った頬を両手で押さえる。
「ん？　どうした謙吾？」
後ろから、恭介の声。
リトルバスターズの他の連中もグラウンドに来ていたようだ。
「……あなたは！」
「お前は！」
「棗鈴！」
「さっささしみ！」
鈴と佐々美はいがみ合う。
「笹瀬川佐々美ですわ！　全く、この世界に来ても、あなたは変わりませんのね。全くなんて腐れ縁ですの！　いいですわ！　今ここで決着をつけてさしあげます」
「ふん！　望むところだ！」
鈴も意気揚揚だった。
「では、ルールを説明しよう」
恭介が割って入る。その間に、無数のものが投げ込まれる。奴等が決闘をする時の決め事のようだった。
「なんだ、連中の知り合いだったのか」
その情景を見て、日向は言った。
「そうね。ただ、手ごわい敵が一人増えたとみて、間違いないわ」
ゆりは、そう呟いた。

「ここに皆集まって貰ったのには理由があるわ」
言ったのはゆり――場所は作戦司令室だ。そこには、一同が集結している。部屋の広さも広さだし、人数も人数なので、かなり狭苦しい。人口密度はかなり高かった。
「一体、どういう事なんだゆりっぺ？」
そのうちの一人である、日向は訊いた。
「我々、死んだ世界戦線は、現在危機と言ってもいい局面にさらさ

れているわ」
「危機？」
音無は首をかしげた。かつては敵であった、天使こと奏とも敵対する事もなくなり、当面の危機は去ったかのように思える。
「――その危機とは」
『危機とは？』
と、一同。
「食糧危機よ」
ゆりは言った。
「我々、死んだ世界戦線の備蓄――つまりは食券の事ね、の消費量がここ最近、急激に増加しているのよ。なぜだかわかる？」
「さあな……（むしゃむしゃ）」
と、謙吾。手にはおにぎり。
「見当もつかねぇな（ガツガツ）」
と、真人。丼ものをかきこんでいる。
「全く、その通りだな。それにしても、この肉うどんの美味さといったら――」
と、松下五段。ずるずると、うどんを食べる。
「このイチゴサンデー、食堂で買ってきたんだけど、とってもおいしいよー」
と、小毬。唇には、クリームか何かがついている。
「マジですか？　あたしも買ってきます」
と、ユイ。
「あたしも、猫達に食べさせるものが欲しい。秋刀魚の塩焼きや、鯖の味噌煮込みを貰ってこよう（後ろで、にゃー、という声）」
と、当然鈴。
「お前らだお前らあああああああ！」
ゆりは渾身の叫びをあげた。思わず耳をふさがざるを得ない。
「食堂の食べ物を作戦司令室に持ってくるな！　全くもう、シリアスな雰囲気が台無しじゃない」

そんな雰囲気あったか、という突っ込みはなかったが。
ゆりは肩で息をしている。よほど肺を使ったのだろう。
「何を怒ってるんだ？　別にこの世界、腹が減っても死なないだろう？」
と、恭介。
「死なないけど、お腹は減るのよ。前の世界であなた達は、死にたくないからご飯を食べた事があった？　お腹が減るからご飯を食べるのよ。そして何より、この世界はどんなに空腹でも死ねないの。このまま食糧が手に入らないままだったら、死ぬほどの空腹に苦しみながら、生きなければいけないのよ」
ゆりは力説した。
「わふー、とてもおいしいのです。このさくさくとした感覚、やっぱりかき揚げうどんです」
と、クド。
「やはりこのスタイルを維持する為には、三食きっちり取らなければな。わたしの自慢のスタイルが崩れる」
と、来ヶ谷。何かボリュームのあるものを食べている。
「昔、人前でものを食べるのは、とても恥ずかしいものとされてきました。でも、腹が減っては戦はできないと言います。しょうがなく、私も食べさせて頂きます。にんにくラーメンチャーシュー抜き」
と、美魚。綾波ネタだった。
「葉留ちんも何かたべたーい」
と、葉留佳。
「わたくしも是非、何かご賞味したいですわ」
と、佐々美。
『人の話を聞けてめぇらあああ！』
ゆりは大声で叫んだ。
「そもそも、なんであんた達がうちに溶けこんでるのよ。別にあなた達は、我ら死んだ世界戦線のメンバーじゃないのに」
「勿論、俺達はリトルバスターズだ」

「そのリトルバスターズがなぜＳＳＳの作戦本部に」
「そんな事は気にするな」
「気にするわよ！　あんた達がいるせいで、ＳＳＳの経済状況は圧迫されているのよ！　気にしないわけないでしょうが！　誰の食券だと思ってるのよ全く！　それと松下五段、あなた肉うどん何杯目よ！　食べ過ぎにも程があるでしょ！」
「いや、ついな」
と、松下五段。
「ついで食べられる量じゃないでしょ。ぜえ、はぁ、もう、突っ込むのも馬鹿らしくなってきたわ」
ゆりは息切れを起こしている。
「――麻婆豆腐、うっとり」
それを横目に、奏は激辛麻婆豆腐を、静かに、静かなのだが、猛烈なスピードで食べ続けていった。

「作戦名を発表するわ！　作戦名、オペレーショントルネードセカンド！」
と、ゆりは言った。照明も暗くなり、なんだか雰囲気が出ている。
「また安直なネーミングだな」
と、音無。
「今回は、あたし達ＳＳＳとリトルバスターズの共同作戦という事にするわ！」
「えー、はるちん行きたくなーい」
と、葉留佳。
「今は筋肉を休ませる時間帯なんだ。正直あまり動きたくねぇ」
と、真人。
「……はは。真人」
と、苦笑いをする理樹。
「働けお前ら！」
と、ゆり。当然、怒声。

「働くざるもの食うべからず、日本にはそういう格言もあるのです」
と、クド。
「作戦概要は、陽動班、実行部隊などの人員を、ＳＳＳとリトルバスターズの両チームから編成、作戦にあたるわ」
「やっとあたし達、ガールズデットモンスターズの出番というわけですね！」
嬉々としてユイ。
「……何だか影薄いけどねあたしら」
と、ひさ子。
「アニメ本編でもちょっとしか出番なかったですし」
と、関根。
「わたしは死んでいるけど、幽霊が怖いって設定だったんですよ。公式ページであったんですが、一体、どういった意味があったんでしょうね。それなのに、本編では、ゆりっぺさんがそのキャラ属性を持っていくし。わたしって、一体」
と、入り江。
「あたしはトラブルメーカーで、日誌を書いているって設定でした。この中では、ひさ子さんが一番恵まれてますね……羨ましい」
と、関根。
まあ、岩沢さんはこの作品では一度も出てこないので、それに比べれば。
――メタ発言はこの位にして（そもそもなんてしゃべらせればいいのか作者にもわからない）。
「あなた達、リトルバスターズでは、バンドを演奏できる人はいるの？」
「はいはい。はるちんできるよー。シャカシャカヘイ」
と、葉留佳は元気よく挙手。タンバリンをどこからか持ち出している。
「キーボードピアノくらいなら」
と、美魚。美魚は指先も器用だし、何でもできそうなイメージはあ

る。
「お姉さんは上手だから、何でも任せるがいい」
と、来ヶ谷。どこかエロい。
「じゃあ、わたしも、ピアノとかバイオリンなら、小さい時に習ってたよ」
と、小毬。
「……なんだか、不安になってきたわ」
と、頭を抱えるゆり。
ギターとか、ドラムを弾ける奴は一人もいなそうだった。

「全く、なんでわたくしがこんな事をしなければいけませんの」
佐々美はそう愚痴をこぼした。
「黙って働け。ささみ」
と、鈴。
バンドをしない連中は、バンドの宣伝の為に、チラシを貼ったり、裏方の仕事をする事になった。
「……なあ、音無どう思う？」
と、チラシを掲示板に貼りつつ日向。
「どうって、何がだ？」
「この告知ライブだよ。告知ライブ、ぶっちゃけ成功すると思うか？」
「頭数が増えたからって成功するものでもないし――」
正直、馬鹿が増えた分だけ、失敗する可能性が増えたような気もする。
「あなた達、何をサボってますの？」
「お前もさっきまでサボってただろうが」
と、佐々美と鈴。
『がーるずでっともんすたーずあんど、りとるばすたーずごうどうライブ、一体どんなセンセーショナルなライブになるのでしょうか。とても気になります』

と、クドはチラシを読み上げた。カラフルに印刷されているチラシだった。
「――あなた達、なにやってるのよ」
と、突如背後から声が聞こえてきた。
全員はチラシを貼る手をとめ、振り返った。そこに立っていたのは、気の強そうな女子生徒だった。風紀委員の腕章をつけている。
「わふー。佳奈多さんなのです」
「わふー」と言いつつ、クドは佳奈多に抱きついていった。
「やめなさい！　クドリャフカ！」
「能美、そいつと知り合いなのか？」
と、音無。
「はい。前、ルームメイトだった二木佳奈多さんです。風紀委員をやってらっしゃったんですよ」
クドは答える。
「ちなみに、今もやってるわよ」
佳奈多の後ろには、ＮＰＣの生徒が何人かいる。
「あなた達、また禄でもない事を考えているわね？」
と、佳奈多。
「な、何のことですか？　わたしには全く持ってかけらも見当もつきません。アイドントノーなのです」
「あたしも知らないな。全く、何のことやら。別にあたし達は食券が欲しいなんて言ってない」
「わたくしも存じ上げませんわ」
と、上からクド、鈴、佐々美だった。皆動揺している様子だった。
「ふん……まあいいわ。もし学校の風紀を乱すような事があったら、この風紀委員の名にかけて、許しませんから。後、チラシ貼りはちゃんと学校に申請してからやるように。今回は見逃してあげるけど」
「……はぁ」
「全く、この学校の生徒会長と副会長は何をしているのよ」
佳奈多は嘆いた。

その頃。
生徒副会長の自室。
「音無さん……音無さん、音無さーーーーん。すやすや」

その頃。
生徒会長の自室。
「麻婆豆腐――麻婆豆腐――麻婆豆腐――すやすや」

「あー、テステス、皆さん、元気ですかーーーーー？」
と、マイクを前にユイ。なぜ猪木ネタなのかは、わからなかった。
バンドのスタンバイは順調に進んでいった。そして、ついに、ライブ当日の日を迎えた。チラシ貼りの効果もあってか、ライブ会場の体育館は満員だった。多くのＮＰＣの生徒で埋め尽くされている。
「今日は、あたし達ガールズデットモンスター、ことガルデモと、リトルバスターズのライブに来てくれてありがとぉおおおぅ、イェイ！」
と言って、一回転するボーカル兼ギターのユイ。そしてポーズを決める。
おおおおおおおおおお。
という地鳴り声にも聞こえる歓声。
『ユイにゃーん！』
『きゃーーひさ子さーーーん！』
『姉御ォォ――――！』
などなど、無数の歓声が聞こえてくる。
「それじゃあ、バンドのメンバーを紹介していくよ。まず、あたし達ガルデモのメンバーから、まず、ドラム担当の入江！」
スポットライトが当たり、入江を映す。
「どうも～～入江です」
と、頼りなさそうに返事をした。

「そして、ベース関根！」
「関根です！　よろしく！」
と、スポットライトが移り変わり関根。
「そして、リードギターひさ子さん！」
スポットライトはひさ子を映す。
「ひさ子です。よろしく」
どことなく落ち着いた感じでひさ子。
「そして、ボーカル＆ギターは、あたし、ユイです。ユイにゃん☆」
猫の手のように両手を丸め、お決まりのポーズをとる。
その途端。おおおおおおおおおおお。
という地鳴りのような歓声が再び。
『うおおおおおお、ユイにゃぁぁぁあん』
『ゆいにゃあああああん』
と、叫んでる人達がいた。
「ありがとおぉ！　それでは、次はリトルバスターズのメンバー紹介に行くよ。それではまず、タンバリン、三枝葉留佳！」
「シャカシャカヘイ！」
と、タンバリンを鳴らす葉留佳。
「続いて、キーボードピアノ、西園美魚！」
「よろしくお願いします」
ドレミファソラシドと鳴らす、美魚。
「ヴァイオリン、神北小毬！」
ヴァイオリンの場違いな程流暢な音を奏でた後、
「小毬です。小毬ちゃんって呼んでね」
と、微笑んだ。
「えー。そして、南アフリカのよくわからない楽器。姉御こと来ヶ谷唯湖！」
「よくわからない楽器ではない。これはブブゼラーだ」
あのワールドカップの時のうるさかった楽器である。はた迷惑な。
びっくりするほど統一感がなかった。一人もギターはいなかった。

これは果たしてライブと言えるのだろうか？
「……っというわけで、ライブを始めていきましょう。まずはあたし達、ガールズデットモンスターから、『クロウ――』って、うあああああ」
ユイは何かに足を取られた。歌う前に一回転しようとして、足を取られ、そのままコケた。
「いったぁ――って、ビー玉？」
ユイの足元には、無数のビー玉が転がっていた。
「あ、ごめん。それはるちんの、ポケットから落ちたみたい」
と、葉留佳。謝っているが、あまり真面目に誤っている感じはしない。
「こんなもの落とさないでくださいよ！　危ないじゃないですか！？」
地面に這いつくばったままで、ユイは言った。
「いや～～面目ない」
葉留佳は言った。勿論真剣みはなかった。
「それよりユイ、早く立った方がいい」
と、ひさ子。
「え？」
ユイは観客に対して、おしりを見せる形で膝まついていた。ユイの普段穿いているスカートは短い。それこそ、そんな恰好になれば、言わずもがなだった。観客の視線はそこにくぎ付けになる。ユイも、しばらくの間をおいて気づく。
「って、いやあああああああ！」
叫んで、立ち上がる。
「ユイ……もうお嫁にいけないよ」
そして、涙目で言った。
それに熱狂して、「だったら俺が――」「俺が結婚してやんよ」「俺が貰ってやんよ」というＮＰＣが大量に出た。
どうでもいいが、けい○んは、ＡＢの制作会社と違う。京○アニメ

ーションではない。
「あなた達！　何やってるの！」
突如、入口が開かれ、何人かの教師が入り乱れてきた。
生徒の群を掻き分け、生徒と、佳奈多はステージまで到着した。
「全く、この時間に、勝手に体育館を使い、こんな事をするなんて、風紀委員として見過ごせません！」
佳奈多はＮＰＣの教師たちを従え、面と向かって言った。
「えー、そんなかたいこと言わないでよー」
と、ユイ。
「駄目です。風紀委員として規律は絶対です。ほら、あなた達、もう下校時刻はとっくに過ぎているのよ。早く帰りなさい！」
『えー、なんだよそりゃー』
『せっかくライブ楽しみにしてたのにー』
ＮＰＣの生徒達の声だ。佳奈多に対しての不満をぶつける。
「あ、お姉ちゃんだ。やっほー、お姉ちゃん」
と、葉留佳。
「葉留佳、あんたこんなとこで何してるのよ」
「シャカシャカヘイ、ってしてるとこ。お姉ちゃんこそ何してるの？」
「わたしは、風紀委員としての務めを果たそうと――」
「えー、いいじゃんちょっとくらい」
「でも――風紀委員として」
「ね。お姉ちゃん、今回だけだから、ね」
「でも――」
次第に語調が弱まっていく。
「お姉ちゃん、私達のライブ聞きたくないの？」
「――仕方ないわね。今回だけよ」
ついに折れた。
「やったー」
と、葉留佳は跳んで喜んだ。

――こうして、無事にライブは行われる事となった。
ちなみに食券は、入場券代わりに、ＮＰＣから集めたのであった。
ＳＳＳ本部。
「――全く、なんなんですかあなた達は一体、一体、どういうつもりなんですか？」
ＳＳＳのメンバー、及びリトルバスターズの葉留佳以外、全員は正座をさせられ、佳奈多にお説教をされていた。
「いいですか。学校において風紀というものは守らなければならないものです。風紀を守ってこそ、健全な学生生活が送れます。その風紀を乱そうだのとあなた達は――」

がみがみ。
「だいたい、体育館を不法に占拠して私的に使用するなんて。しかも、生徒達から食券を徴収するなんて、とても放っておけるものではありません――それに――」
がみがみ。がみがみ。
「ゆりっぺ、なんだこいつは、天使よりやっかいだぜ」
と、藤巻。
「知らないわよ。なんなのよもう、一体！」
と、ゆり。
「そこ！　私語をしない！」
佳奈多にビシッと、指をさし、注意を促す。
「なぜ神である僕がこんな事を――」
と、直井。膝がピクピクとしている。
その横では、正座しつつ、うとうとと寝ている奏の姿があった。器用なものだった。
「正座をさせるくらいなら、俺は筋トレをさせて欲しいぜ」
と、真人。どこか物足りなそうだ。
「全く、この程度で根をあげるとは情けないな」

と、謙吾。剣道をやっているので、正座には強いのだろう。
「正座は、日本人の心なのです。こうして背筋を伸ばし、ぴーんとしていると精神が――ですが、そろそろわたしも足がピリピリしてきたのです」
「あたしも足が痛い。早く普通に座りたい」
と、クドと鈴。
皆、そろそろ限界といった様子だった。
「お姉ちゃん、もうそれくらいにしてあげてよ」
「けど、風紀が――」
「ねぇ、お姉ちゃんったら、ねぇ」
「けどね、葉留佳、私にも立場ってものが――」
「お姉ちゃん、私のこと、嫌い？」
「う……」
妹に弱いのか、押し黙った。
「仕方ないわね――、これ位にしておくわ。次やったら、この位ではすみませんからね」
佳奈多は、妹の葉留佳にして滅法弱かった。
どうでもいいが、来ヶ谷だけは、要領よくづらかっていた。ある彼女らしかった。
なんにせよ、死んだ世界戦線と、リトルバスターズの食糧危機は、難を逃れたようだった。

「それにしても、この作戦司令室も人が増えたわね……」
ゆりは呟いた。作戦司令室こと、校長室を眺めつつ。いつも足をかけている机に、頬を埋める。その机は、もとは校長の机だったのだろう。
「――野球の試合をする場合、職員室への届け出が必要です。その場合の手続きは――」
「あー、もうわかったわよ！」
ゆりは、佳奈多の小言に激昂する。さっきから、耳元で佳奈多の説

教にも似た説明をゆりは受け続けていた。
「もう、本当にわかったんですか？」
佳奈多は困惑げにいう。佳奈多もリトルバスターズのメンバーとして、野球に参加する事になった。妹の頼みは断れなかったようだ。
「大体、別にあたしがやりたいってわけじゃないのよ。あんた達のリーダーが――」
「知りたくないのか？　この世界の秘密を」
「知りたい！　――おっほん！」
ゆりは、恭介の甘言に気を取られたが、咳払いで取り直す。
「それにしても、人が多いわ。人が――」
ＳＳＳのメンバーは全員が全員この場所に集まっているわけではない。それでも何人かの主要なメンバーはこの場に集まっているのだ。そして、リトルバスターズのメンバー全員も。
さながら、学級崩壊したクラスのように、皆好き勝手やりまくっていた。騒がしいどころの話ではない。
「へっ、そんな軟な腕で大丈夫か？」
なぜか作戦本部の中央部には、腕を肩までまくったシャツ一枚の真人がいた。その正面に座っているのは、奏だ。奏は、腕まくりなどしていなかった。両者の間には、肘を置くのにちょうどいいくらいの机。奏は、こくりと頷き。
「大丈夫。問題ないわ」
「へっ。今さら『一番良い筋肉をお願いします』なんて言ってもおせぇんだぜ」
奏と真人は、台に肘をつき、お互いの手を握り合う。別段変な意味はなく、ただ腕相撲をするだけのようだ。傍目には、巨漢と華奢な少女にしか見えず、とてもアンバランスな組み合わせだった。
「――レディーファイトです」
遊佐が、抑揚のない声のまま言った。
「うおおおおおおおおおお！」
それを合図に、真人は雄叫びをあげた。それと共に、手にものすご

い力を込める、が、ぴくりともしない。奏は表情をいつものまま変えずに、微動だにもしなかった。
「やるじゃねぇか嬢ちゃん。だが、俺の筋肉はまだまだこんなもんじゃ、って、あいぎゃあああああ！」
ポキリ、という音がした。真人の絶叫が響きわたる。筋肉はまだまだでも骨が耐え切れなかったようだ。そのまま、ペタリと、真人の手の甲は地に伏す。
「勝者、立華奏」
遊佐はそう、コールし、奏の片手をあげる。その間も、真人は転げまわっている。
「すごーい。奏ちゃん、真人君に勝つなんて」
と、小毬。
「――くそっ、もう一回だ。もう一回！」
真人はすぐに復活した。気力は少しもなえていないようだ。
「骨が折れたんじゃないのか？」
と、音無は訊いた。
「もう治った！」
真人は即答。
「はぇぇ」
と、日向。
その間。別のところでは。
「わたくしは、この恋心をどうすればいいんですの？」
「わかります。僕も、同時に二人の人（男性）を愛してしまった身。その気持ちは痛いほどわかります」
佐々美と、直井だ。
二人は恋愛歓談をしていたようだ。
――お互い、同じように、二人の男性を愛してしまった事について話していたようだ。直井の性別が男なのは、この際放っておこうと思う。
「ああ、なんてわたくしは罪深い女ですの」

「愛する気持ちに、罪なんてありません。それは、神である僕が保障します」
「まあ、なんて力強い言葉ですの。直井さん」
「礼には及びません。なんせ僕は神ですから、はっはっはっは」
別のところでは。
「わふー、すごい筋肉なのですー、いのはらさんと同じくらいすごいのですー」
「こうですか？」
クドは野田の上腕二頭筋にぶら下がっている。
さらに別のところでは。
「――こういう場合、直井さんは受け、音無さんが責めになるわけです」
と、美魚。
「おおー。流石美魚先輩、勉強になります」
美魚は、ユイに対して、腐女子教育を行っている。「……めもめも」と、メモをとっている遊佐がいた。
「そして、こういった場合に、日向さんが突如現れる。まさしく、恋のトライアングルです」
『おお～～』
と、二人は声をあげた。
「あー、もううるさいわよあんた達！　ちったぁ静かにしなさいよ、全くもう、こんなんなら外で何かしていた方がマシだわ！」
人口密度が高すぎて、何だか霧消にイライラしているゆりは叫ぶ。たださえ佳奈多の小言でストレスがたまっているのだ。
「外で何するんだ？　野球でもするのか？」
と、日向。
「……あいにく、俺達リトルバスターズは極秘練習中なんだ。その練習を人に見せるわけにはいかない」
と、恭介。
「……そもそも俺達は、練習なんてもの一回でもしたか？」

と、謙吾。
「馬鹿……敵に一回も練習してない事がバレたじゃないか！」
「あたし達は何の為に地獄の練習をしてきたっていうのよ」
それを見て空しくなったゆりは言う。
「地獄だったのは俺達だったろゆりっぺ……ゆりっぺは嬉々としてやってたじゃねぇか」と、日向。
「ああ？　なんか文句ある？　日向君」
「いや、なんでもねぇよゆりっぺ」
凄まれて手のひらを返す日向。
「それにしても、練習しないと暇ね。敵も居なくなったし」
かつて敵だった奏は、そこで呑気に腕相撲をしている。ある意味殺伐としているかもしれないが。

「緊急の作戦会議を開くわ」
「なんだ、ゆりいきなり」
と、音無。作戦司令室のカーテンは閉め切られ、部屋の照明は落とされている。何だか神妙な雰囲気だ。
「現在、私達、死んだ世界戦線は、かつてない危機に直面している。この死ぬ事のない世界で、私達は時間を持て余している。退屈は人を殺すわ。やる事のない無為な時間こそ、この死ぬ事のない世界で最も闘うべき、にっくき敵なのよ」
「――つまり、ゆりは暇なんだな」
と、音無は要約した。
「そ、その通りよ。なによ、悪い？」
思えば、あの野球でのしごきも、ただ勝ちたいわけでなく、単純に暇つぶしだったのだろう。
「そこで皆にアイディアを募るわ。何でもいいから、この怠惰な時間をつぶす、有意義な提案をしてちょうだい」
と、ゆりは言った。要は遊びの提案をしろという事だった。
「筋肉さんがこむらがえったなんてどうだ？」

「僕は音無さんと二人で浜辺でおっかけっこ」
「剣道なんてのはどうだ？　どうせならチャンバラでもいい」
「プロレス、サッカー、野球！　それから、それから、お笑い番組みたいなコント！」
「皆で詩を作ってみるというのはどうでしょう？」
「猫と一日中ごろごろしたい」
「日本の和の心を知る為、茶道などどうでしょう」
「お姉さんは気持ちよければ何でもいい」
「宮沢様と、野田様とご一緒なら」
「俺はゆりっぺが望むならどんな事でもしよう」
「皆でバトルランキングをすればどうだ？」
「皆で麻婆豆腐」
「わたしは、皆でお茶会をやりたいよー」
「竹箒を指先の一点で支え続けるゲーム」
名前を書くのが面倒なので、各人、誰が何を言ったか、当ててみて欲しい。正解は言わない。
「見事なくらいにバラバラね。ゆりはため息をついた。これをひとつに絞るのは並大抵の事じゃないわ」
ゆりはため息をついた。
「なぁ、ゆり」
「ん？　なに音無君」
「全部やればいいんじゃないか？」
「どういうこと？」
「ひとつに絞れないなら、全部やればいい」

――というわけで。
「なぜ、こうなった？」
音無の提案とはいえ、疑問を呈さざるを得なかった。
勝負は、障害物競争のかたちをとり、各員が考えた障害物を乗り越えていき、最初にたどり着いた者が勝者という形になる。

会場となったのは、ギルドへとつながる地下通路だった。各ステージには様々な障害物が仕掛けられていて、それらをクリアすると、次のステージへ進めるというわけだ。
「皆、位置についたわね」
スタートラインには、ＳＳＳとリトルバスターズのメンバーがそろっている。要はやろうとしている事は障害物競争だった。ちんたらとやっていたらいつまでも終わらないし、なんにせよ勝負事の方が面白いだろう、という事だった。
「勝負を面白くする為に、このレースにはひとつ商品をかけてあるわ。それは――」
もったいぶってゆりは言う。
「それは、一日戦線リーダーになれる権利よ。まあ、よくあるアイドルの一日署長とか、一日店長とか、そんな感じのやつね。これはただ、戦線のリーダーになれる権利というわけではないわ。一位になった者は、負けた者たちにどんな命令でもできる、絶対服従させる権利を持つのよ！」
勝負を面白くする為に、『一日だけ戦線メンバーのリーダーになれる権利』を授与される。いわばこれは、絶対命令権のようなものだった。そういう名目のもとに、何でも言う事が聞いてもらえる、という、王様ゲームの王様に、一日だけなれる権利のようなものだ。
「それがあれば、皆が僕の事をクライストと――」
と、竹山。
「それがあればゆりっぺと――」
と、野田。
「いつも俺をかませ犬呼ばわりしている奴等に逆の立場を――」
と、藤巻。
「腹いっぱい肉うどんが食べれるわけだ」
「麻婆豆腐」
松下五段と奏。
みなぎっている連中もいるようだ。どうでもいいが、さっきから、

麻婆豆腐しか奏は言っていない気がする。
「皆、位置について！」
と、言いつつゆりも位置に着く。自らも参加するようだ。
「用意」
という、言葉で皆が構える。
「スタート！」
ゆりは自らが持っている拳銃を空に向けて発砲する。それがスタートの合図だった。
「うおおおおおおお！」
「いくぜぇぇぇぇぇ！」
野田と藤巻が突っ込んでいった。一斉にスタートを切った中でも、その二人が抜けていく。そして、最初に第一関門にたどり着いた。
「なんだこりゃ？」
と、藤巻。
「見たところ麻婆豆腐のようだが」
いくつもの器が並べられている、中身は等しく麻婆豆腐だ。
「その麻婆豆腐を食べきる事が、第一の関門よ」
ゆりは言った。四の五のしている間に、皆が追いついてくる。
「へっ、なんだ楽勝じゃねぇか」
と、藤巻は手元にあったレンゲで、麻婆豆腐を口に運ぶ。
――と。
「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお！　かれぇぇぇぇぇ！」
口から火を噴く、という言葉が正しく当てはまりそうな位の辛さのようだった。
「馬鹿ね、奏ちゃんリクエストの激辛麻婆豆腐よ。辛くて当然じゃない」
と、ゆり。その横では奏がもくもくと麻婆豆腐を食べ終わり
「おかわり」
と差し出した。
「奏ちゃん、一人一杯よ」

ゆりはため息交じりに言った。
「いっぱい？」
「一杯！」
ボケても駄目だったようだ。

次の関門。

「なんだこいつは？」
何とか第一関門をクリアーした連中の前に、新たな障害物が現れた。鎧武者の置物のようなもの。手には竹刀。他にももう一本竹刀が備え付けられている。
「そいつから一本取れば、次のステージへ進めるわよ」
と、ゆりは言った。思ったのだが、ゆりは何が出るかしっているのなら、相当有利な気がする。ちなみにこの障害物は、謙吾の提案だったりする。
「へっ、こいつから一本取ればいいんだろ。楽勝じゃねぇか」
藤巻は竹刀を手に取った。瞬間。
「ぐあ！」
ものすごい勢いで面を取られる。
「ああ、言わんこっちゃない。ちなみに、この鎧武者、宮沢謙吾の動きをトレースしてるの。相当強いわよ」
「それを先に言ってくれゆりっぺ」
藤巻は息絶えた。

「なんだこれは？」
次のステージには何もなかった。
「へっ、ついに来ちまったようだな」
と、真人。言うまでもなく、これは真人の提案だ。
「筋肉さんがこむらがえった、ついにこのゲームのヴェールが脱がれるぜ」

そう、おののきながら言った。
「なんだその筋肉さんがこむらがえったって？」
と、日向。
「さあ、だるまさんが転んだみたいなものじゃないの？」
と、ゆり。
「へっ、そんな生ぬるいゲームじゃないぜこいつは。言わば、筋肉が沸き筋肉踊る、そんな筋肉の祭典だ。みろ、今にも俺の筋肉がこむらがえっちまいそうだぜ」
ちなみにこむらがえるとは、足の筋肉の痙攣の事で、ふくらはぎ（こむら）に出やすいから、こむらがえりと言うそうである。
真人の言葉に、一同は戦く。
「さあ、行くぜ。筋肉さんがこむらがえった！」
真人は叫ぶ。
筋肉さんがこむらがえったが終わった時、意識、及び記憶を維持していたものは誰もいなかった。

次々と訪れる障害物。

『円周率を三ケタまで言え』（竹山出題）
「ばかなぁ！」
と、叫ぶ野田。
「俺達にそんな高等な問題が解けるわけねぇだろうが！」
藤巻。

『竹箒を五分間指先の一点で支え続けろ』（椎名出題）

「ん、と、うんとうわあああ！」
叫んでユイは壮大にこけた。
「あさはかなり」
その横で、椎名は余裕そうだった。

『短歌を作ってください』（美魚出題）

「麻婆豆腐。愛しの麻婆豆腐。嗚呼麻婆豆腐」
作、立華奏。
「奏、季語がないからな」
と、音無。
「ついでにいえば、俳句の字数です。それでも字余りですが。短歌は五七五七七です。短歌には、季語は必須ではありません」
と、美魚。

『一発芸！』（ユイ出題）

「長嶋茂雄の真似」
と、奏。妙に上手かった。中の人的に。

『鬼ごっこ』（直井）

「音無さーん、待ってください、音無さーん」
妙に嬉々としていた直井だった。
「宮沢さまーーーー、待ってください、野田さまーーーー」
佐々美も同様だった。

『肉うどん』（松下五段）

ガツガツガツガツ（松下五段）

他にも、数々の障害物を、出場者達は乗り越えていった。

音無は、次のステージにたどり着いた。幸運な事に、音無が先着だ

ったようだ。その空間には、何もなかった。何もなかったが、誰もいなかったというわけではなかった。
金髪の少女がいた。
「酷いじゃないの。皆で楽しそうに、そんでもって、あたしだけぼっちって。どんな扱いよ。個別シナリオでもぼっちだったし。本編でもぼっちだったし。何がリトルバスターズエクスタシーの一番人気よ。笑いなさいよ、笑えばいいじゃない！　わっはっはっはって！」
メタ発言もいい加減にしろ、という感じだった。
「沙耶か――」
「――しかもなんなのよあの温泉ネタ、あたしだけお色気担当ってわけ。安易な露出をしてもいい、使い捨てキャラなわけね。売れなくなった漫画みたいなエロ担当なのよ」
「いや、意味がわからないんだが。それで、なにが障害物なんだ？」
「ふっ、見てわからない？　あたしよ。あたし自ら、楽しそうにしているあんた達を邪魔しに来た、障害物ってわけ。楽しそうにしているあんた達に加われない、ぼっちのあたしが僻み根性満載で、邪魔をしにきたってわけ。笑いなさい。笑えばいいじゃない。あっはっはって！」
再度哄笑する沙耶。自虐的だ。
「いや、普通に加われればいいだろ」
「それができたらしてるわよ！　いくわよ」
沙耶はスカートから拳銃を取り出した。沙耶の愛銃、コルトコンバットコマンダーを取り出す。
「このまま撃ち合うっていうのも、芸がないわね。西部劇風にしない？　お互い背を向けてたって、三歩歩いてから撃ち合う」
「まあ、別にいいけど」
そういって、音無は、銃を取り出した。
「いくわよ」

お互いに背中をくっつける形になる。
「いち」
一歩。
「に」
二歩。
「さん」
三歩。
ポチ。
「ポチって、え？　うあああああああ！」
沙耶は悲鳴をあげた。
突如現れた巨大ハンマー、突然の事に沙耶は反応できなかった。そのまま壁を突き破り、どこか彼方へと、沙耶は飛んでいく。
「おぼえてなさいよぉぉぉぉぉ！」
と、悪役みたいな捨て台詞を吐いて。
「対天使用トラップが、まだ残ってたんだな」
音無は、納得したように呟いた。
しかし、ドジなスパイだった。

「どうやら、ここが最終面みたいだな」
音無は呟いた。ここに着いたのも、音無が先着だったようだ。というか、何人が生き残っていて、何人脱落したのかわからなかった。
「ふっ、久しぶりね」
「お前は」
奏そっくりの人物が、そこにたっていた。どこか目が赤い。
「――あの時のダーク奏か」
「そう。ハーモニクスで現れたもう一人の立華奏よ。ちなみに、原作者の麻枝准は、「奏は純真なんですよ。あんな悪いセリフ言いませんよ」と、言っていたわ。こういった性格付けは、岸監督の所業よ。この前京大で講演を聞いてきたから間違いないわ」
もうメタ発言を自重しなくなった。

「今回は、お前自身が障害ってわけか」
「そうよ。恐怖で戦くがいいわ」
ダーク奏は、まるで悪魔の羽のような、黒い羽をはやした。そして、両腕には鋭利な刃物。臨戦態勢に入ったというところだった。死後の世界じゃなかったら、死の恐怖におののいていたところだろう。
「死より恐ろしい痛みを教えてあげるわ」
「なぁ……」
「なに？」
「麻婆豆腐一年分で手打たないか？」
「打つわ」
即答だった。
こうして、障害物競走の勝者は、音無という事になった。

「勝ったはいいが」
なんだか空しい音無だった。
「おめでとう。音無君」
「おめでとう、音無」
「おめでとう」
何だかエヴァ最終回みたいな拍手で、音無は出迎えられた。
「それで音無君、皆に聞いて欲しい事って何かあるの？」
と、ゆりは聞いてきた。
「いや、別に」
「音無さんの願いなら、僕はどんなハードなプレイでも受け入れる覚悟があります。ローソクだって、ロープだって、鞭だって。嗚呼音無さーーーん」
当然のように直井。
「皆に聞いて欲しい事か」
音無は満面の笑顔で言った。
「奏と二人っきりでいちゃいちゃしたいから、お前ら成仏しろ」
言った瞬間、皆が殺気だったのがわかった。

「――ああ。遊んだ、遊んだ」
と、ユイ、はご満悦そうだった。外に出た時にはもう、夕方になっていた。夕日が世界を赤く染め上げる。
「で、結局誰が勝ったですか？」
ユイは聞いてきた。
「さあ、結局、誰が優勝したんだか」
ゆりは曖昧に答える。
「なあ、ゆり。何だか頭が痛いんだが」
と、音無。
「気のせいよ」
ゆりは答える。
「それに何だか、記憶も」
「気のせいです。音無さん」
笑顔で直井。
「それじゃ勝者はどうなるんですか？」
と、竹山。
「最後まで立ってた人がいなかったんだから、いるわけないじゃない」
ゆりは答える。
「そんなぁ、じゃあ、僕の呼び名は」
「俺の噛ませ犬としての立場は」
「ゆりっぺ……」
と、エゴ丸出しの三人。対して。
「――お腹いっぱい」
「ああ。俺も肉うどんの食べ過ぎでもう持たん」
二人は障害物にあった、好物で、満腹になっていた。
「――まあ、いいんじゃないか？　俺も、こんなに遊んだのは久しぶりだった」
日向は明後日の方向を見つつ、そう言った。

「俺達も楽しかった。リトルバスターズ一同を代表して、礼を言おう」
と、恭介。
「別に、礼を言われるような事はしてないわ。あたし達も楽しかったし」
と、ゆり。
「ね、みんな」
「はい！」
「おう！」
「ああ。楽しかったぜ」
戦線メンバーは、各々が各々の言葉で答えた。
「あたしも楽しかった」
「はい。わたしもとっても楽しかったのです！」
「俺も思わず、筋肉さんがこむらがっちまったぜ」
「わたくしも、そこそこ楽しかったのですわ」
と、リトルバスターズのメンバーも答える。
気づけば、約束していた野球試合まで、後、もう少しだった。
「――良い試合をしましょう」
「ああ。しよう」
ゆりと恭介は、そう目を交わらせる。
「みんなー、集まってぇぇぇ！」
グランドから、小毬の声が聞こえてきた。何でも写真を撮るつもりらしい。
『皆が集まった記念に』とのこと。小毬の提案だった。
「別に、今度の試合が終わってからじゃだめなのか？」
と音無が言っても、
「駄目なんだよ。それは絶対だめ。今できる事は、今しないといけないんだよ」
と、小毬からは返ってきた。
「そこ、ちゃんとしゃがみなさいよ」

と、ゆり。
「二列目の人は前かがみに、左の人はもっと寄って、フレームから外れるでしょ」
佳奈多もそう統率する。
「ささ、もっと寄れ。後、あんまりあたしに近づくな」
「言ってる事がむちゃくちゃですわよ棗鈴」
と、鈴と佐々美。
「どうでもいいが、二人とも声が似てるな」
と、日向。
「え？　そうかな？」
近くにいた理樹が聞く。
「ついでにいえば、お前も」
中の人ネタはおいといて。
「それで、ゆりっぺ――なんで俺が写真を撮る係なんだ」
と、藤巻。藤巻の手にはカメラ。スタンドつきの立派なカメラという事もなく、当然のように、誰かが手で持ってないと取れないようなものだ。
「だって、あなたそういう役割でしょ？」
ゆりは、言った。どうでもいいが、藤巻の扱いが色々酷い。
「じゃあ……いいか？」
藤巻は、よくよくのない声で聞く。
「何か掛け声かけなさいよ」
「はい、チーズとか。そういうのか」
「麻婆豆腐」
と、奏。
「はい、まーぼーどうふ」
藤巻は言って、シャッターを切った。一枚の写真が完成する。その写真は、その後、死んだ世界戦線の作戦司令室に飾られる事になった。

その日の夜、各チーム、戦線チームとリトルバスターズのメンバーは、作戦会議という事で、集合する事になっていた。作戦会議の後、音無は外に出ると、既にそこは夜だった。
「――あら、あなたは」
「お前は――確か、なんだっけ？」
「笹瀬川佐々美ですわ！」
佐々美は叫んだ。
「わりぃ、何だか舌噛みそうな名前だったし」
「まあ、もういいですわ」
佐々美はため息をついた。
「ところであなた、棗鈴を見ませんでしたこと？」
と、佐々美は聞いてきた。
「いや、見てないけど、それがどうしたんだ？」
「逃げましたのね。全く、今度の試合でどちらがマウンドに立つのか、白黒をつけてさしあげまようと思いましたのに」
佐々美は再度ため息を吐く。
「――また喧嘩か？」
「違いますわ。生産的な話し合いですわ」
そうとは思えない音無だったが。ともかく。
「全く、騒々しい連中ですわね。けど、まあ、嫌いじゃないですわよ」
佐々美も相当騒々しい分類に入る事には、あえて突っ込まない音無だった。
「まあ、嫌いにならなかったら何よりだ」
音無は苦笑を浮かべる。
「あら、あなた達何をしてるの？」
次に現れたのは佳奈多だった。
「二木さん、あなたこそ何を」
と、佐々美。
「作戦会議とかいうものも終わったみたいだし。ちょっと夜の学校

を警備してきたの。何だか夜遅くに、変な女学生が出るっていう噂を耳にしたから」
心当たりのある音無だった。
「まさか、幽――」
「馬鹿ね、ここは死んだ後の世界なのよ。幽霊だっていうなら、あたし達自身が幽霊みたいなものよ」
佐々美の言葉を佳奈多は打ち消す。
「あっ、佐々美さんと、佳奈多さんですー」
と、クドの声が聞こえてきた。
「ん？　君達は一体何をしているんだ？」
と、来ヶ谷。
「なんてことないただの雑談です」
と、佳奈多。
「お前らこそどうしたんだ？　揃って」
と、音無。
女性陣大集合といった感じだった。どことなく、ハーレムものの主人公のような感じになっている音無。
「これから皆でパジャマパーティーするんですよー」
と、ユイ。
「奏ちゃんのお部屋でやるの」
と、小毬。
こくり、と頷く奏。
「色々、普段はできない、乙女の恋の話とか、恋の話とか、恋の話をするんですよ」
と、ユイ。
「そう、普段はできないようなカップリングの話などを」
ぽっと頬を染め、美魚。
「猫とみゃーみゃー戯れたりするんだ」
と、鈴の肩に乗っている猫が、みゃーと鳴いた。
「お菓子食べたりするんだよー」

と、小毬。
「ところで夜にそんな高カロリーなものを食べて平気か小毬君」
と、来ヶ谷。
「しまったー、忘れてたよー」
と、大山の口癖を言う小毬。
「ふ、あさはかなり」
どことなく自己の存在を主張する椎名。
「ゆりもいるんだな……」
音無は呟く。
「いるわよ。なによ。いちゃ悪いっての？　かつては敵対していた奏ちゃんの部屋に泊まりに行くのが、そんなにおかしいっていうの？」
ゆりは言った。
「別に悪いなんって言ってない。お前にしては偉い進歩だな、と思っただけで」
「まあ、この季節といえば、定番なのは怪談だな」
と、来ヶ谷。誰かと会話していたようだ。
「ひっ」
と、ゆりは頬をひきつらせ、身震いする。
「なんだ？　君は死後の世界に居ながら、怪談が怖いのか？」
と、来ヶ谷。
「そんなわけないじゃない！　そんなわけ！」
ゆりは頭を振った。
「先輩――あたしの設定取らないでくださいよー、確かに原作ではちっとも表現されてなかったですけど――」
と、入江。
「そもそも、あたしと入江の違いが全くわからなかったってという」
と、関根。
「――どうでもいいが、ひとり、男が混じってる気がするんだが？」
と、音無はあざとく見ていた。

「ぎくっ」
と、体を震わせるのが一人。
「紹介しよう。君と会うのは初めてだったとは思うが、理樹子君だ」
と、来ヶ谷。
髪を長くし（かつらだろうか）スカートを穿いた少女にしか見えない少女（？）がいた。どうでもいいが、可愛かった。可愛いと音無は感じてしまった。感じてしまった事にどこかやばさを覚えた。
「はじめまして……その理樹子です」
「ぽっ、男の娘。これはいけます」
と、美魚。
「今、男の娘って言ったよな？」
と、音無。
「男なら細かい事は気にするな。君も女装して、私達のパジャマパーティーに参加すればいい」
来ヶ谷は強引に音無を連れて行こうとする。
「今、女装って――」
「生憎奏君の住まいは女子寮なのだよ。つまりは、男子禁制なんだ。この意味が君にもわかるだろう？」
そう、来ヶ谷は言う。
「ちょっと待ってください。女子寮に男子が入るのは賛同しかねます」
と、佳奈多。
「全く、おかたいな君は」
と、来ヶ谷。
「なんとでも言ってください」
「ええ。いいじゃんお姉ちゃん」
そう葉留佳。
「いいわよ」
即答だった。心変わり早すぎ。
「と――いうわけで」

忍び寄る女子たちの魔手。
「やめろぉぉ、やめてくれぇぇぇ！」
「初めまして、結弦子ちゃん」
小毬はそう挨拶をした。
「佐々美君、佳奈多君、協力して、結弦子ちゃんを着替えさせるんだ」
と、来ヶ谷。
「はあ」
「ええ……」
呆けたように頷く二人。
「うわ……」
と、ゆり。
「わふー。大きいのです」
と、クド。なにが？　まさかそんなとこまで。
「案ずるな。全てをお姉さんに任せればいい」
羨ましくなるような言葉で責める来ヶ谷。
「やめろぉぉぉぉぉぉ！」
夜の校庭に、音無の悲鳴が響き渡った。
「――なんだかすげぇ不公平な気がするんだ」
と、藤巻は呟いた。涙を垂れ流している。
「どうして僕らの扱いって、こうなんでしょうね」
と、竹山。彼もまた泣いていた。
「ゆりっぺ――――ゆりっぺ――――。ゆりっぺぇぇぇぇ！」
野田は叫んだ。涙を流しながら。
「てめぇら、涙を流している暇があったら、汗を流せ、いいから筋トレだ」
と、真人。今は夜の筋トレ中のようだ。謙吾もそれに参加している。
「男同士の友情を深めるというのも、なかなかいいものだと思うぞ」
「こうなったら自棄だ！　俺達も筋トレに参加するぜ！　行くぞ竹山！」

「僕の事はクライストと――」
竹山は、腹筋三回目で、もう根をあげた。
「もうだめです……」
「てめぇ！　なってねぇぞ！」
「僕は頭脳派なんです。やはり、こんな単純な運動僕には相応しくない」
「屁理屈ならべてねぇで！　いいから筋トレしろ！　竹山！」
「クライストです～～～！」
竹山の情けない悲鳴は響き渡っていった。
夜通しで男たちの筋トレは続いたそうだ。

そして、試合当日。天気は快晴だった。整地されたグラウンドに、各チームのメンバーは集結している。
「いい。相手のチームは強敵よ。一瞬の油断も許されないわ！」
試合が始まる前のミーティングで、ゆりは言った。
「そうだ。油断するな。全ては神である僕の為に勝利をもたらすために」
と、ありがたい言葉を授ける直井監督。
「お前はいいから黙っててくれ」
頭を悩ませる日向。
「いい？　死ぬ気で勝つわよ皆！」
各々が、各々の言葉で応えた。

ダイヤモンドの中央に並ぶ一同。お互い、向かい合うように整列している。
「これより、死んだ世界戦線と――」
「――我らリトルバスターズの試合を開始する」
前半をゆり、後半を恭介が言った。
「良い試合をしましょう」（ゆり）「ああ。勿論だ。良い試合をしよう」（恭介）

「言っておきますけど、棗鈴。ソフトボール部四番にしてエースであるこのわたくし、笹瀬川佐々美の足を引っ張らないでくださいますこと？　おっほっほっほ」（佐々美）
「うっさい。だまれぼけ。それはあたしの台詞だ」（鈴）「皆さん、お怪我のないように」
（美魚）「皆さん頑張りましょう、ねばーぎぶあっぷなのです」（クド）「お姉さん、思わず、はぁはぁしてしまいそうだ」（来ヶ谷）
「全く、野球なんてやったことないのに大丈夫かしら」（佳奈多）
「大丈夫だよお姉ちゃん、リラックスリラックス」（葉留佳）
「言っておくが、屑ども貴様らに敗北は許されていない」（直井監督）「お前はいちいち人のやる気削ぎすぎなんだよ！」（日向）
「先輩、ゆいにゃんのホームラン期待しててくださいね」（ユイ）
「ああ。せいぜい三振しないことを期待しとくよ」（日向）
「ふっはっ！　見ろ！　俺の二頭筋を！」（真人）「まだまだ！　私の広背筋はそんなもんではありませんよ！」（高松）
「うわ――アホが二人ですね」（ユイ）「全く、馬鹿ばかりだ」（野田）「お前が言うな」（日向）
「見せてやる。俺がただの噛ませ犬じゃないって事を！　噛ませ犬じゃ！」（藤巻）
「相手にとって不足はないな」（謙吾）
「ああ、俺達もな」（音無）
各員、所定のポジションについていく。
一回の攻撃は、俺達、死んだ世界戦線からだ。
奏は一人、どこか彼方を見つめていた。
「どうしたんだ？　奏？」
俺は、そう聞いた。
「なんでもないわ――なんでも」
奏は頭を振る。
「ただ、前にもこの情景を見た事がある気がする」
奏は呟いた。

「この情景？」
「世界には、幾多もの可能性がある。今ある世界は、見えているひとつの側面でしかなく、また、別の場所から見た世界も存在する。どちらも同じ世界で、また、違う世界でもある。どちらも正しく、どちらも間違っている」
「――何が言いたいんだ？　奏？」
「――もしかしたら、私達は、もう既にどこかで出会っているのかもしれない。既にではなくて、これから出会うのかもしれないのだけれど」
奏はそれっきりで、言葉を打ち切った。
「プレイボール！」
白球が舞う。甲高い音が響く。
こうして、俺達死んだ世界戦線と、リトルバスターズの試合が始まった。

Ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5258p/

佐々美と佳奈多の野球戦線

2010年12月19日16時00分発行